

「全国紙上数学談話会」と「四国数学紙上談話」について

片山 真一

徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部
基礎科学研究部門 自然科学分野
〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1
E-mail: katayama@ias.tokushima-u.ac.jp

Zenkoku Shijo Sugaku Danwakai and Shikoku Sugaku Shijo Danwa

Shin-ichi Katayama

Department of Mathematical Sciences, Faculty of Integrated Arts and Sciences,
The University of Tokushima Tokushima 770-8502, Japan
Corresponding author: S. Katayama, katayama@ias.tokushima-u.ac.jp

Abstract

Zenkoku Shijo Sugaku Danwakai is a Japanese mathematical journal published by the Department of Mathematics, Faculty of Sciences of Osaka University from 1934 to 1949. This mimeographed journal played an important role in the mathematical research announcements during World War II. Recently this journal was uploaded as pdf files at the HP of the Department of Mathematics of Osaka University. The URL is <http://www.math.sci.osaka-u.ac.jp/shijodanwakai/>. Shikoku Sugaku Shijo Danwa is also a Japanese mathematical mimeographed journal published by the Department of Mathematics, the Gakugei College of Tokushima University from 1951 to 1956. We have compared the authors, titles and contents of these journals and concluded that Shikoku Sugaku Shijo Danwa played a successive role to Zenkoku Shijo Sugaku Danwakai. In 2014, we have uploaded this mimeographed journal as pdf files at the HP of the Department of Mathematical Sciences of Tokushima University (<http://www-math.ias.tokushima-u.ac.jp/>). We must mention that many frontier results in those days are included in these journals, although they were written in Japanese.

1 はじめに

最初に、筆者が「四国数学紙上談話」という雑誌の存在を認識した経緯から始めてみよう。2009年に徳島大学総合科学部の一部の建物の耐震改修が行われ、数理科学教室の研究室、資料室も改修された。建物の耐震改修が完了し、筆者は雑誌係として新しい数理科学教室の図書室の書籍、資料の整理を行った。その折に見つけたのが「四国数学紙上談話」という文献であった。その時点では、徳島大学附属図書館にデータとしては登録されているものの、数理科学教室の資料目録には記

載が無く、どのような性格の資料であるのか見当もつかなかった。資料を読み進み、徳島の古い数学関係者にも色々話を伺って、目次を整理していくうちに、ここに記すようなことが明らかになってきた。第2次世界大戦後の徳島の数学の発展に少なからず貢献した資料であると思われる。現時点で、分かったことを報告しておきたい。

2 全国紙上数学談話会について

最初に、数学の世界ではかなり知られている「全国紙上数学談話会」について簡単に紹介しておこう。「四国数学紙上談話」の果たした役割を

説明する前に、まず数学の世界で「全国紙上数学談話会」が果たした役割を理解しておいてもらう方が良いと思えるからである。以下の引用文は、大阪大学理学部数学教室 HP からこの雑誌の性格を簡潔に伝えるものとして転記したものである。

『大阪大学 50 年史からの引用』

『「全国紙上数学談話会」の刊行である。これは 1934 年 6 月発刊、謄写版刷りの週刊小冊子であったが、戦争末期の中断期を除いて、1949 年 9 月に経済的事情で廃刊となるまでの間、全国の新進気鋭の研究者がその成果を速報し、また相互批判を行なう場所を与え、ユニークで貴重な役割を果たした。』

『大阪大学 25 年史からの引用』

『数学教室新設当座の著しい対外的事業としては当教室が主催となっていた「全国紙上数学談話会」の刊行がある。これは 9 年(1934 年)に発刊したガリ版刷りの週刊小冊子であったが、殆んど全国に亘る新進気鋭の研究者が *in statu nascendi*ⁱ の数学を自由に発表する紙上の談話会として全国的に好評を博したものである。終戦後間もなく、経済的な理由で廃刊のやむなきにいたり、今日に至っている。』

この 2 つの引用文からは、「全国紙上数学談話会」という大阪大学数学教室発行の和雑誌が、第 2 次大戦中および戦後の混乱期に日本の数学の研究の発表の場として重要な役割を担ったという自負がうかがえる。以下「全国紙上数学談話会」の雑誌の形態と内容について、説明を加えておく。昭和 9 年から昭和 24 年までの 16 年間にわたって、大阪大学数学教室が主体となってガリ版刷りで刊行していた“週刊小冊子”が「全国紙上数学談話会」である。上で引用した大阪大学 25 年史、大阪大学 50 年史にも書かれているように気軽な話題提供、問題提起、それぞれの研究分野の概説や本格的な研究論文に至るまで多岐にわたる内容の掲載された数学専門誌であった。その当時の日本数物学会ⁱⁱ（数学と物理学の学会は、1945 年まで一つの学会を成し、1946 年に日本数学会と日本物理学会に分離独立した）の学会欧文誌「Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan」は、残念ながら、発行が途切れがちであり、それに比して週刊であるこの和雑

誌は、貴重な数学の成果発表の場になっていた。その事実を端的に示す例として、確率解析における伊藤清氏の世界的に著名な結果が、第二次大戦の最中に次のような形で発表されていることを挙げておく。

「全国紙上数学談話会」, 244 号(論文 No1077), 昭和 17 年(1942 年)に「Markoff 過程ヲ定メル微分方程式」と題して発表されているのが伊藤氏の戦時中の成果である。後年になって、この成果を含めた業績を評価された伊藤氏は、2006 年に国際数学会議において第 1 回 Gauss 賞を受賞し、2008 年度には文化勲章を受章したのである。他にもこの雑誌に発表された内容が後に欧文誌に発表された事例は、いくつかある。ここでは、筆者が知っている次の例について詳しく述べておこう。投稿当時に東北大に所属していた淡中忠郎氏が「全国紙上数学談話会」, 236 号(論文 No1046), 昭和 17 年(1942 年)に「 p -進体に関する一二の注意」と題して論文を発表した。論文の内容は、局所体 k 上のガロア拡大体 K/k に関する体の乗法群 K^\times の -1 次のガロアコホモロジー群ⁱⁱⁱを、巡回拡大でない場合に記述しようとして試みたものであり、当時世界的に進められていた類体論の算術的な証明の試みの一環と言える。後に淡中氏は、発表した自分自身の発表内容を同誌に発表された関連する他の日本の数学者たちの結果も引用して（特に中山正氏の勧めで、中山氏の研究成果も含んだ研究成果）を英文に翻訳して（日本数学会の欧文学会誌）「Journal of the Mathematical Society of Japan」に下記のように掲載したのである。

「Tannaka, T, Some remarks concerning p -adic number field, Vol. 3 (1951), 252-257」.

この淡中氏の英訳論文の参考文献リストにある「全国紙上数学談話会」掲載の 5 文献（淡中氏の本論文を含む）を以下に挙げておく。

[1] 淡中忠郎, p -進体に関する一二の注意, 全国紙上数学談話会, 236 No1046 (1942), 1050-1056.

[2] 中山正, 淡中氏の Hauptgeschtsatz im Minimalen についての一注意, 全国紙上数学談話会, 247 No1092 (1942), 1596-1602.

[3] 松島与三, 淡中先生の Hauptgeschtsatz im Minimalen についての一つの注意, 全国紙上数学談話会, 252 No1113 (1943), 213-217.

[4] 豊田五浪, 松島氏の談話 1113 より, 全国紙上数学談話会, (2)-13 No140 (1949), 461-463.

[5] 国吉秀夫, p -進体に関する二つの実例, 全国紙上数学談話会, (2)-15 No159 (1949), 534-535.

このように, 第2次大戦中および戦後の混乱期にも, 海外の研究者の目には触れない形であっても日本国内では, 数学の研究が継続されていたこと並びにその研究成果を発表する場として「全国紙上数学談話会」という雑誌は大きな役割を果たしていたことが判る. さらに, 戦後になって欧文雑誌という研究成果発表の場が充実することに伴って戦時中に蓄積された研究成果が, 世界に向かって発信されたという好例になっている. しかしこの雑誌は, 研究成果を永く記録するという面では, 紙の質においても印刷技術においても問題があり, 近年は経年変化による劣化が目立っていた. 実際の所, 私が私有している分冊も色は茶色に変色が進んでおり, 曲げた所から折れて崩れししまう程劣化している. このような状況を憂い, 日本の貴重な数学の記録として将来の世代に残す運動が起きて, 2007年に至って大阪大学理学部数学教室が主体となって, 全号^{iv}電子化(PDF化)された. 今は, 公開された電子データをネットで自由に閲覧^vしダウンロードすることができるようになっている.

3 日本数学会と欧文雑誌

ここで「全国紙上数学談話会」をめぐる環境の変化を説明するために, 戦中および戦後の数学の学会誌全体の状況について概観しておこう. [3]での彌永昌吉氏の発言記録によれば,

『45年の12月に数物の総会をやって, 両学会の発起人会を作って, 物理学会は翌年の4月, 数学会は6月にできました. そして, 数学の方が社団法人になったのは1952年になってからだったんです. 和文誌「数学」は47年から岩波から出ましたが, 欧文誌はすぐには出せなくて48年から出しています. それから数物のときには常会で話すときと英文でプロシーディングスに出してよかったです. 数学会になってからは, 欧文の方はレフェリーつきでちゃんとやろうときめました. 毎月はできないので季刊にしました. 学会で集まるときにはたくさん話が出るのですが, それを全部欧文で出すわけではない. なるべくたくさん「数学」の寄書にして発表してほしいということで, はじめは寄書が多かったのですが, だんだん変わってきました.』とのことである. この彌永

氏の文章から伺えるのは, 戦前の数物学会誌「Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan」には, 査読制は無く, 1948年に新たに発刊された数学会の欧文誌「Journal of the Mathematical Society of Japan」で査読制が導入されて発足したということである. また戦前および戦中の上記の数学物理学学会誌については, 1943年の17号の後1944年1945年の合併号を出したにとどまっておき, 英文では「学士院紀要」, 和文では「全国紙上数学談話会」が主な発表の場^{vi}となっていたことも記されている. なお学会誌が欧文で出るようになってもしばらくは和文学会誌「数学」の「寄書」のコーナーが発表の場として使われたことも上記の記事の発言記録から分かる. しかし戦中と戦後まもなくの間, 貴重な数学研究発表の場を務めた「全国紙上数学談話会」の役割は終わり. 日本の数学者は, 新たに作られた欧文学会誌「Journal of the Mathematical Society of Japan」および国内外の数学専門誌に自由に研究を発表する様になっていく. ただ数学の分野では, 現在でも東北大, 名古屋大, 大阪大等の大学の数学紀要が世界的にも認められた専門誌として数学会の学会誌と同等かそれ以上の高い評価を得ている. この特殊な状況は, 他の理系分野の研究者には, どう説明しても大抵は理解してもらえないことを一言申し添えておきたい.

4 四国数学紙上談話について

さてここからが, 「四国数学紙上談話」についての説明になる. 大阪大学卒業後, 大阪大学副手等を経て新制の徳島大学に赴任した霜田伊左衛氏は, 「全国紙上数学談話会」に既に計9編の関数論関連分野の論文を投稿していた. 霜田氏は, 徳島大学学芸学部^{vii}に赴任した後に, 徳島大学数学教室の渡辺義勝教授および, 霜田氏と同じく大阪大学から徳島大に着任した田村孝行氏(後に米国カリフォルニア大教授)と共に徳島大学学芸学部数学教室主催で, 昭和26年(1951年)に雑誌を発行した. それが「四国数学紙上談話」である. 全国数学紙上談話会と同様の趣旨を持った自由な研究, 論争の発表の場として, 形態も同じくガリ版刷りで発行された雑誌である. その発行に関する趣旨の部分^{viii}を第1号の「発足に当って」から引用しておこう.

『同じ学問に励む人々が相よってその道を語り討論しあうことは大変喜ばしいことでありますが、四国四縣の同士が一堂に会することはたとい一回さえも現下の事情では言うべくして実現不可能の事と存じます。されば会合に代えるに紙上討論を以てせんとしてここに発足するのが、“四国数学紙上談話会”でございます。まとまった論文ならずとも断片的な小論文の発表、問題の提出、紹介、さては各教室の近況など、気軽に胸襟を開いて存分に語り合う、楽しい紙上討論会たらしめたいと存じます。勿論印刷の拙劣さ、司会の不行届など多々不備な点もございますが、皆様方の御協力御支援によりまして漸次立派なものに育てて行き度いと存じます。このささやかな紙上会合が僻地の四国数学界に微小なりとも御役に立ち得ますならば幸甚と存じます。何卒多数各位の御協力御鞭撻をお願い致します。 June 30 1951 』

後年この「四国数学紙上談話」の資料の散逸を恐れた霜田氏が自分の手元にあった分冊を製本し数学教室に残された。耐震改修後の文献整理の際に筆者が目にしたのがその資料である。製本の2分冊の上巻の巻頭に霜田氏が残した下記の序文は、この雑誌の特徴と発行当時の徳島大学学芸学部数学教室の様子を今に伝える貴重な資料なのでこれも書き起こして引用しておく。

『四国数学紙上談話 (製本冊子 序文)
はじめに

新制大学が発足すると、何れの大学も旧制大学に追いつこうと懸命の努力をした。徳島大学学芸学部(当時)数学教室では工学部の数学教室の諸先生と合同して談話会や輪講会を初めた。当時は耐乏生活の時代で自由に他大学へ出かけて共に研究討論する機会をもつことが少なかった。その時、阪大の清水辰次郎教授発行の全国紙上数学談話会にならい、田村孝行氏が中心となり渡辺義勝教授と相談の上、四国数学紙上談話を徳島大学学芸学部数学教室より発行した。応募論文は毎日に増して応募者を全国的になって隆盛になった時、会費の収集が思わしくなくついに廃刊の止むなきに至った。残念なことであったが数年に及ぶ刊行は僻地四国における数学の研究発達に貢献するところ大であったと言わねばならない。四国数学紙上談話もおいおいと散逸して今は私の所有す

るもののみとなった。之を永久に教育学部数学教室にとどめ、建学当時の苦労の一端を後世に伝えたい。 昭和 57 年 3 月 霜田伊左衛門』

製本された「四国数学紙上談話」の製本(上下2巻)には、昭和26年6月の1号から昭和31年5月の27号まで5年分が収録されている。序文に書いてある通り「全国紙上数学談話会」を引き継いだ雰囲気ガリ版刷りの雑誌である。散逸を恐れた霜田氏が定年を前に昭和57年、2冊に製本してまとめたものが、幾度かの改組、建物の移転、改修の際もずっと引き継がれ総合科学部数理科学教室に保管されていた。実は筆者は、「全国紙上数学談話会」の分冊や「四国数学紙上談話」の分冊を何冊か入手していた。しかしこの2雑誌が、雑誌名も雑誌の形態もあまりに似通っていたため、今日まで区別が付かないまま保有していたのである。霜田氏が製本し教室に保管された冊子の中身は、既に紙の色が褐色にまで変色しており、ページの角は所々崩れて丸く変形する所まで劣化が進んでいる。徳島大学総合科学部数理科学教室の雑誌係として、この冊子を見出した際に、今電子化する作業を怠れば、もはや資料として後年に残すことはできないと判断した。まず数理科学教室に電子化のために必要な予算措置の了解を取った。一方で、専門の業者に見積りの相談をしたところ、電子化の作業には、製本を一度分解し、一枚一枚ばらばらにして撮影する作業が必要とのことだった。電子化を急げば、唯一残る一次資料を大きく損なう恐れもある。一方でこの機会を逃せば、電子化する作業にすら取り掛かれないほど劣化が進行するかもしれないと悩んだ。結局、放置して劣化が進み判読不可能になるより、後世に引き継ぐために電子化を試みておくべきだと考え、PDF化を実行した。結果として、依頼した業者(京都光楽堂)の尽力もあって、元の製本2分冊は、製本も新たに、目立った損傷もなく手元に残ることになった。電子化したデータは、元の資料の色味が残り、字句の読みづらいところがあるものの、後の世代に残すべきデータの電子化は成功したと言って良い。2014年の初夏に総合科学部数理科学教室のHPにPDFデータをアップロードし、学外からも自由に閲覧やダウンロードできるようになった。下記にそのアドレスを記しておく。

総合科学部数理学教室のHPの下記のURL:<http://www-math.ias.tokushima-u.ac.jp/>をクリックし、左の項目から「四国数学紙上談話」の所をダブルクリックすれば、PDFファイルを見ることができる^{vii}ようになっている。なおこのノートでは、「四国数学紙上談話」と略称しているが、正確には「四国数学紙上談話」(1951年～1953年(1号～13号))、「数学紙上談話」^{viii}(1953年～1956年(14号～27号))と名前を変遷させている。以下「四国数学紙上談話」の特徴を明らかにするために投稿者名と論文数のリストを作成して下記のような表にまとめた。

著者名	所属	投稿論文数
田村孝行	徳島大学芸	28
木村直樹	東工大	27
渡辺義勝	徳島大学芸	15
永見啓応	松山農大	9
山田深雪	島根大	9
松村宗治	近畿大	9
福岡力	香川大	7
内海勇蔵	大阪女子大	7
丸山隆玄	徳島大工	5
安倍齊	徳島大工	5
井関清志	神戸大	5
霜田伊左衛	徳島大学芸	4
吉田誠一郎	長崎大	3
田畑不二夫	京都学芸大	3
西岡義夫	六甲高校	3
平島卓	徳島大学芸	2
中村幹男	徳島大学芸	2
添田喬	徳島大工	2
渡辺哲男	香川大	2
五十嵐知雄	高知大	2
佐々木義雄	愛媛大	2
石井正	愛媛大	2
大島勝	岡山大	2
菅原正博	岡山大	2
中野昇	広島大	2
木ノ原明	広島大	2
谷岡源二郎	山口大	2
小林安高	滋賀大	2

以下1編のみを投稿した投稿者を所属別にまとめ

た。

寺井正明, 鉄谷一敏, 出原茂美, 松村卓郎, 一條義博(徳島大学芸), 麻義夫, 浜田至男(徳島大学芸・学生), 林嘉男(徳島大工), 川田治毅, 林伸樹, 植松茂暢(香川大), 内田寅雄, 藤田正三郎(高知大), 竹之内脩, 田代義宏, 大槻富之助(岡山大), 占部実, 森新治郎, 吉田紀雄, 佐久間元敬, 佐藤始(広島大), 池田峰夫(広島大理論研), 佐田実(広島大皆美分校), 吉永恭一(広島女子大), 尉邦彦(宮崎大), 加藤良作(東工大), 渡辺勝(東大生産技術研), 小柴善一郎(大阪大), 井上高志(神戸大), 白石義明(滋賀大), 平岡忠(茨城大), 沼倉克己(山形大), 片山茂(愛媛東宇和高), 松尾告知(東京開成学園), 鳥取八起(香川県三豊郡東中学), 桜木武(徳島県坂東小), 森口兼久(徳島県東光小), 山村政吉(徳島県堀江北小)

上のリストから読み取れるように、全国の研究者から投稿があることから「四国数学紙上談話」が、全国的な投稿雑誌として認識され利用されていたことが判る。また徳島大学学芸学部の学生や徳島大学芸学部出身と思われる教員の投稿もかなり多く、その当時の徳島大学学芸学部の教育のレベルの高さがうかがえる。さらに「全国紙上数学談話会」に投稿していた研究者が、「四国数学紙上談話」にも投稿している場合(重複投稿者)もかなりある。そこで「四国数学紙上談話」だけでなく「全国紙上数学談話会」にも重複して投稿した著者の氏名と投稿論文数を以下に列挙しておく。

重複する投稿者の氏名, 「全国紙上数学談話会」投稿時の所属, 投稿論文数

松村宗治, 台北大, 157
 霜田伊左衛, 大阪大, 9
 大島勝, 高知高校, 7
 田畑不二夫, 京都師範, 5
 占部実, 広島文理大, 4
 木村直樹, 大阪大, 3
 井関清志, 大阪大, 2
 渡辺義勝, 横浜高工, 1
 内海勇蔵, 大阪大, 1
 田村孝行, 所属不明, 1

「全国紙上数学談話会」と「四国数学紙上談話」の投稿者の所属を比較すると、両者ともに全国紙と呼んで差し支えない雑誌であり、全国から（「全国紙上数学談話会」の方は、統治下の台湾からも）投稿が寄せられていることがわかる。しかし強い違いを挙げれば「四国数学紙上談話」への投稿は、投稿者の所属の範囲がやや狭く徳島を中心とした中国四国からの投稿が主体であることが分かる。また共に学生の投稿も含まれているが、「全国数学紙上談話会」の方の投稿者には、後に研究者となる東大や大阪大の学生たちの投稿もあるのに比して、「四国数学紙上談話」への学生の投稿は、主に徳島大学芸学部所属の学生や卒業生とみられる教員に限られる点にも違いがみられる。しかし重複投稿者の多さを示す上記のデータは、「全国紙上数学談話会」の廃刊後に「四国数学紙上談話」が、その趣旨だけでなく、実質的にもその継続雑誌的な位置を担っていたということを示唆するものである。「四国数学紙上談話」は、決して霜田氏が製本分冊の序文で卑下しているような四国の片田舎の地方大学の和雑誌に留まるものではない。ある一時期ではあるが全国的な雑誌の役割を担っていたと言って良い雑誌であった。

また「四国数学紙上談話」への投稿には、半群論の研究者の投稿が非常に多い。中でも半群論の世界的な大家であった田村孝行氏（徳島大学芸からカリフォルニア大に転出）と木村直樹氏（東工大からチューレーン大に転出）の両氏が、中心となって集中的に発表した世界的な半群論の揺籃期に於ける貴重な文献が数多く含まれていることは特筆される。

5 徳島大の欧文数学誌

「四国数学紙上談話」の発刊と前後して、徳島大学でも数学の欧文誌が、発刊されている。投稿者も当初は学外者（木村直樹氏（東工大）や南雲道夫氏（大阪大））等を含んでいるが、その後は、主として徳島大学内の数学研究者の成果発表の場として機能してきた。雑誌名は、当初は徳島大学学芸学部自然科学の数学編として発行されていたこともあり下記のように何度か変遷している。その後、ちょうど「四国数学紙上談話」の廃刊と同時期に自然科学の紀要から独立して数学だけの欧文雑誌「Journal of Gakugei, Tokushima

University, Mathematics」となって、名称を変えながら継続して発行されて現在に至っている。これは、戦争中に「全国紙上数学談話会」が担っていた役割が戦後発刊された日本数学会の欧文誌「Journal of Mathematical Society of Japan」に引き継がれて廃刊されたことと同様に大学の欧文紀要ならびに国内外の専門誌が充実して研究発表ができるようになっていく中で、「四国数学紙上談話」がその役割を終えたことを示唆している。徳島大の欧文紀要の名称の変遷^{ix}を追ってみよう。

- 1) Journal of science of the Gakugei Faculty, Tokushima University, Mathematics 1 (1950).
- 2) Journal of Gakugei College, Tokushima University, Natural science (Mathematics) 2 (1952)
- 3) Journal of Gakugei, Tokushima University, Natural science (Mathematics) 3-4 (1953-54)
- 4) Journal of Gakugei, Tokushima University, Mathematics 5 (1954)
- 5) Journal of Gakugei, Tokushima University, Natural science (Mathematics) 6-7 (1955-56)
- 6) Journal of Gakugei, Tokushima University, Mathematics 8-15 (1957-66)
- 7) Journal of Mathematics, Tokushima University 1-34 (1967-2000)
- 8) Journal of Mathematics, The University of Tokushima 35-47 (2001-2013) 継続中

なお、徳島大学の欧文数学雑誌「Journal of Mathematics, The University of Tokushima」は、2年前から四国の他大学の研究者数名も加えた数学紀要編集委員会を新たに設立した。現在は、学外からの投稿も受理して編集委員で査読を行う査読誌に雑誌の性格を変えつつある。歴代の徳島大の数学雑誌が、当初から学外の研究者の投稿も学内投稿者と同等に受理していたことを踏まえ、今後も、発展的に継続させていき、最終的には、四国の他の研究機関には無い数学専門の欧文査読誌に育てていきたい。

6 おわりに

発見当初は、「四国数学紙上談話」については、情報が不足し不明な点も多かった。その際阿南工業高専の名誉教授の福島光男氏には、色々質問し丁寧に答えて頂いた。同氏は、徳島大学学芸学部

に在学中に田村孝行教授の教えを受けて、半群について研究され、卒業後に阿南工業高専の数学教授を務められていた方で、徳島大学の非常勤講師も長く務めていただいた方である。さらに今回の電子化に当たり、筆者が電子化の作業による一次資料の破損を恐れていること知った同氏は、氏が個人的に保管されていた「四国数学紙上談話」のコピーを快く徳島大学に寄贈された。これを2分冊に製本した上で、新たに数理科学教室で保管することになった。また上で述べたように霜田氏の残した2分冊は、京都の製本業者の光楽堂にお世話になり、無事に電子化した上で製本し直して、結果として大きな損傷もなく手元に残ったため、徳島大学総合科学部数理科学教室としては、今後上下2巻からなる「四国数学紙上談話」を2部所有し後世に伝えていけるようになった。大事な資料を快く寄贈していただいた福島氏にこの場を借りて深く感謝の意を表したい。さらに今回、目次作成をしていく作業中に、霜田氏の資料では欠号となっていた第20号が、福島氏から寄贈していただいた資料には含まれていたことが判明した。現時点では、「四国数学紙上談話」第20号については、福島氏からの寄贈分が我々の所有する唯一の一次史料である。

なお最後に、霜田伊左衛氏が、後世に託して資料をまとめて教室に残されていたおかげで、今回の電子化が可能となったわけであり、霜田氏に、深く感謝する次第である。しかし残念ながら霜田伊左衛氏は、既に2年半前に逝去されており、残

された資料を電子化して、我々のさらに後の世代に伝えることができるようになったことを御報告できなかったことは、悔やまれる。また度重なる教室の移転や改組の際に既に失われていても不思議ではなかった「四国数学紙上談話」という貴重な資料が無事に残されてきたことは、歴代の徳島大学の数学の教員と事務職員の方々の尽力の賜物であることに触れて結びの言葉としておきたい。

参考文献

- [1] 大阪大学理学部数学教室編, 全国紙上数学談話会, URL(<http://www.math.sci.osaka-u.ac.jp/shijodanwakai/>).
- [2] 徳島大学学芸学部数学教室編, 四国数学紙上談話, URL(<http://www-math.ias.tokushima-u.ac.jp/>).
- [3] 「数物学会の分離と二つの科学」講演記録, 1995年10月9日, 機械振興会館にて.
- [4] 日本数学会100周年記念号, 「数学」30巻第2号, 岩波1977.
- [5] 佐宗哲郎, 電子版で読めるようになる戦前の湯川論文-数物会誌のオンライン化について-, 日本物理学会誌, 61 No6 (2006), 433-435.
- [6] 福島光男(編), 数学界, 数学教育界に於ける徳島県出身者の活躍について(資料集), 1997.

論文受付 2014年9月11日

改訂論文受付 2014年9月22日

論文受理 2014年10月5日

論文注釈

ⁱ 誕生したままの状態(生まれたての数学というような意味で使われていると思われる)。

ⁱⁱ これらの歴史的な事実については、文献[3], [4], [5]による。

ⁱⁱⁱ 巡回群のコホモロジー群の周期は、2なので、-1次のコホモロジー群は1次のコホモロジー群と同型であり、ヒルベルトの定理90により自明となることが知られていた。ただ著者達も気にしているように彼らの結果は、局所体のガロア拡大の場合にしか適用できない。それは、類体論の算術的な証明が完成した今日から見れば、大域体の場合に同様の理論を展開するには、体の乗法群ではなくイデール類群を扱う必要があったからに他ならない。

^{iv} 2007年度日本数学会学会ニュース(URL:<http://mathsoc.jp/veryoldnews.html>)による。

^v 大阪大学理学部数学教室HP(URL:<http://www.math.sci.osaka-u.ac.jp/shijodanwakai/>)

^{vi} 岡部康則氏の発言による。

^{vii} 電子化した資料のHPへのアップロードと目次作成に関しては、徳島大学総合科学部数理科学教室技術補佐員の井上悦子さんに大変お世話になった。

^{viii} この雑誌名「数学紙上談話」は、「全国紙上数学談話会」という名前と非常に紛らわしい。

^{ix} このデータは、徳島大学図書館のOPACシステムで検索可能であり、これはそれを整理したものである。